

長野県埋蔵文化財ニュース

No.36・37

1993.3.29

(財)長野県埋蔵文化財センター

〒388 長野市篠ノ井布施高田字佃963-4

TEL 0262-93-5926

特集

—— 浅間山麓の縄文中・後期遺跡 ——

長野県は、四方を高い山々に囲まれ他県と画されている。その中で長野・群馬両県の間に立ちあがるのが浅間山(2,568m)を主峰とする上信火山帯の山々で、浅間山から高峰山、湯ノ丸山、烏帽子岳と連なっている。

これらの南麓には火山麓扇状地が広がり、緩やかな傾斜の尾根上には各時代の遺跡が立地している。

近年、上信越自動車道や圃場整備など各種開発行為に伴う発掘調査が大規模に行われるようになり、考古学的資料の蓄積がなされてきている。

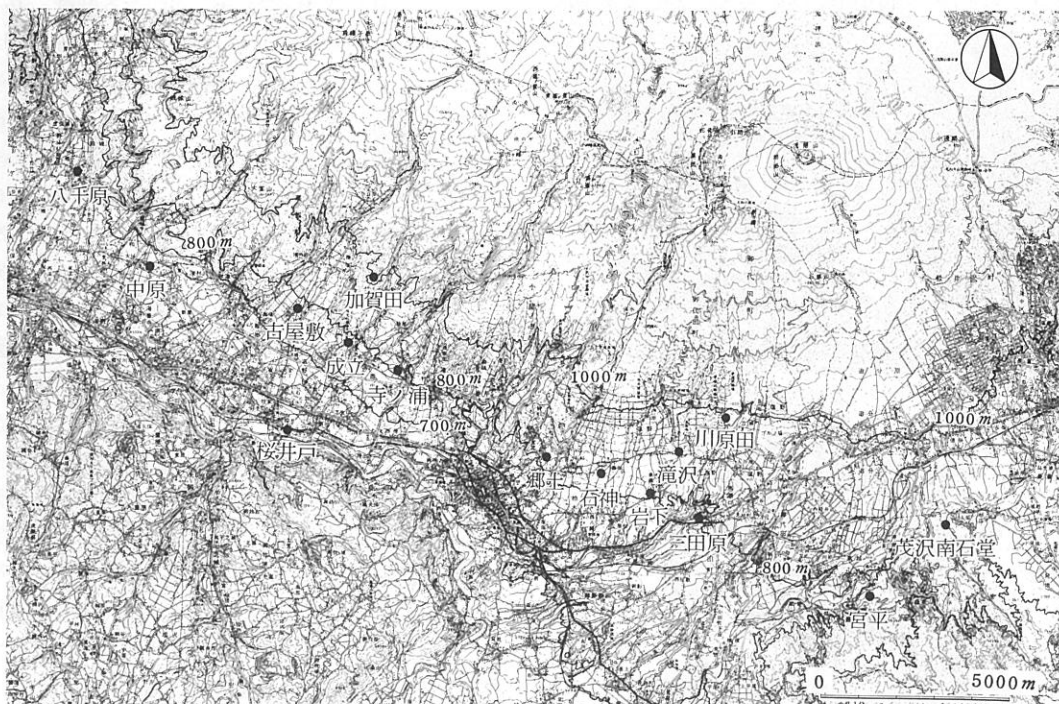
昨年末、浅間山を越えた群馬県月夜野町矢瀬遺跡で縄文時代後・晩期の「ムラ」の全貌が発見され新聞紙を賑わせた。

では、浅間山麓ではその時期どのような様子であったのだろうか。

浅間山麓における縄文時代中・後期遺跡の学史を紐解いてみると、東部町と小諸市にかかる戌立・寺ノ浦遺跡が古くから知られている。昭和初期に調査がなされ、敷石住居跡や炉跡等が発見され国の史跡指定を受けている。また、小諸市郷土遺跡や御代田町宮平遺跡でも敷石住居跡が発見され、軽井沢町茂沢南石堂遺跡では石棺墓や配石遺構が調査されている。

このように、浅間山麓にも良好な資料を提供する当該期の遺跡が数多く存在する。さらに、最近では集落構造の把握に迫れそうな調査事例も増えてきている。

そこで、今回はこれらの遺跡に焦点を当て、過去の調査資料の呈示や最近の調査内容の紹介を通して、浅間山麓の縄文中・後期遺跡群を広域的に考える足がかりとしたい。



浅間山麓縄文中・後期遺跡の分布(1/150,000)

上田市の縄文中・後期遺跡

上田市教育委員会 久保田 敦子

八千原遺跡 八千原遺跡は上田市の東部、殿城地区漆戸の神川第二段丘上のはぼ中央の微段丘上にあり、平成元年に林之郷遺跡と共に発掘調査を行った。調査は約7,000m²を行ったが、検出された遺構の主たる時代は、縄文時代中期から後期にかけての住居跡で、特に敷石住居跡は34軒検出された。

ここでは、その敷石住居跡の中で特に特異な形態を呈しているC地区の第9号住居跡について述べてみたいと思う。C地区は調査した地区の中で最も北に設定した地区で、標高も他地区より1～3m高い。出土した住居跡は20軒で、そのうち敷石住居跡は10軒ある。また、他地区に比べて後期の遺構が多く確認された。

本住居跡は調査区の南東部に検出され、床面の標高は約548.60mで、直径は約2.35mで本遺跡の中で最も小型の住居跡である。床は円形を呈しているが、南側端に框石のような横に長い石が設置されているので柄鏡形を呈していた可能性もあるが、張出し部は確認できなかった。壁高は深い所で10cmだが、本来の高さは不明である。主体部の外には8個の柱穴が巡り、すべて直径は20cm前後で深さは10cmから20cmである。框石のような石の中心から炉の中央を結ぶ直線の方を主軸とするならば、国家座標に対してN-5°-Eの方位

である。

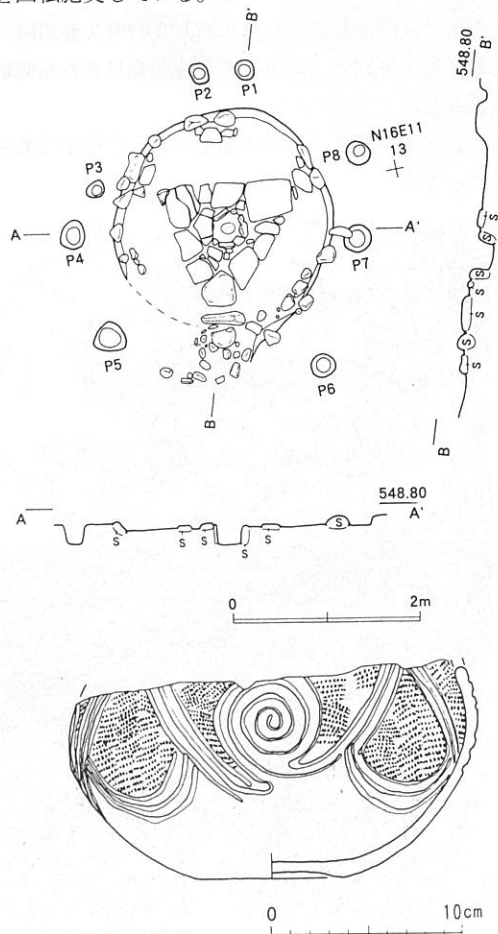
床には、鉄平石が炉を中心にして、東、西、南の方向に頂点をおいた逆三角形を構成して並べられていた。石の面が奇麗に揃って三角形をつくっていることから、当初からこの形に敷いたものであることがわかる。住居跡の壁と敷石の東西南の3つの頂点が接する部分は扁平の河原石を立てるように設置されているが、そのうち南の石は先に述べたように框石のように見える。

炉は6つの河原石を使用した石囲炉で、最大幅は45cmで、炉底は赤褐色を呈して締まっていた。内部には炉体土器の堀之内I式の浅鉢が正位に入っていた。

炉体土器の形態は、やや上げ底ぎみの底部より立上がり、扁平ぎみな球形の胴部に移行する。頸部から口縁部は欠損していた。胴部には4単位の渦巻と曲線的な文様が沈線によって展開し、区画を施した後に縄文を回転施文している。



八千原遺跡C地区9号住居跡・炉・出土遺物



東部町の縄文中・後期遺跡

東部町教育委員会 堀田 雄二

烏帽子岳から浅間山に連なる上信火山群は、東部町から軽井沢町までの数十kmにも及ぶ広大な裾野地形を南側に形成している。肥沃で南～南西に向かう日当たりの良い緩やかな傾斜地には、縄文時代中期から後期にかけての集落遺跡が数多く展開している。

とりわけ東部町内には、敷石住居跡が検出され国史跡に指定された戊立遺跡をはじめ、久保在家・古屋敷・加賀田・真行寺・油田・桜畑・山の越・釜村田・大川・中原・辻田遺跡などの拠点集落であったと考えられる遺跡が標高700～800mにあたる山麓面に広がっている。

また、上記遺跡が展開する扇状地の扇端部付近や、千曲川沿いの河岸段丘などにも、新屋・桜井戸・舟久保・伊勢原・羽黒・桃畑・若宮遺跡など、縄文時代中期後葉を中心とした時期に集落が営まれていたことが確認されている。

これらの遺跡のうち、発掘調査によって十分な検討が可能な遺跡はわずかであるが、部分的な調査結果や出土遺物等により、時期別の特徴を概観してみよう。

まず中期初頭から前葉にかけてであるが、この時期の遺跡の多くは、前期末から連続して集落が営まれたと思われ、その数も比較的多い。しかし、遺跡規模はあまり大きくなく、残された遺構・遺物も少量である。平成3年に調査された下金山遺跡をはじめ、古屋敷遺跡・真行寺遺跡などで遺構が検出されている。

中葉になると、近年注目されている「焼町土器」が多数出土している真行寺遺跡と、それに先行する時期の「プレ焼町土器」がまとめて出土した久保在家遺跡・大川遺跡などの存在が知られる程度で、遺物もあり発見されていない。ハヶ岳南～南西麓では、この時期に文化の繁栄を迎えたようであるが、当地方ではまだ発展途上であったのだろうか。

後葉には、遺跡の規模・数が急激に増加し、中期遺跡の大半が該期遺跡と言っても過言ではないほどである。特に曾利Ⅱ式期以降の増加は著しく、これらのほとんどが後期前葉まで繁栄が続き、後期中葉になると急激に減少・衰退してしまうのである。

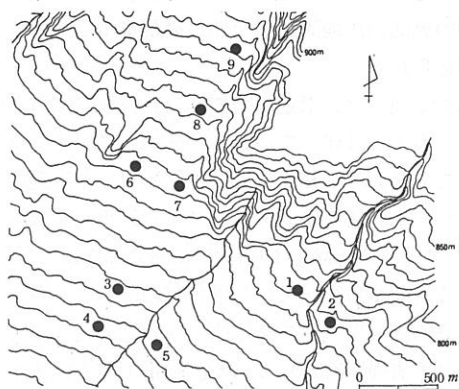
つまり、短期間の生活の場であったと思われる加賀田・大川・若宮遺跡等がわずかにあるものの、大半は数～10型式間継続していたようである。さらに戊立・古屋敷・真行寺・辻田遺跡などでは、10型式以上・後期中葉まで連続していたと考えられる。

後期初頭から前葉にかけては、町内全体で30軒以上の住居跡が発見されているが、すべて敷石住居跡である。

そして、その半数程は柄鏡形を呈しており、中期末から隆盛を迎えた文化は、関東地方などの強い影響を受けて、この地に華開くのである。戊立・古屋敷・加賀田・真行寺・釜村田・中原・辻田・桜井戸・伊勢原・羽黒・桃畑・若宮遺跡など中期後葉より遺跡の広がりはやや減少するものの、ほぼ同程度の繁栄が続いたようである。

後期中葉になると、前記にした数遺跡で遺構・遺物が発見されている程度まで、急激に衰退してしまう。この傾向は後期後葉から晩期にかけて、さらには弥生時代中期まで続き、この間あれ程の遺跡を残した人々はどこに行ってしまったのであろうか。現在のところほとんど調査されていない千曲川低位段丘や小河川の河床付近に、その謎を解く鍵が隠されているかも知れない。と同時に、中部高地のみならず、関東地方など隣接地の動態についても、詳細な検討をしていくことが必要であろう。

東部町内の発掘調査が本格的に実施されるようになって、ちょうど10年が過ぎようとしている。当初から関わった者の一人として、立案・進行に反省することしきりである。しかし、上記のことがおぼろげながら明らかになってきただけでも、それなりに成果があったということであろうか。では次に、主要遺跡の発掘結果について、縄文時代中期後半から後期後半に主眼を置いて触れてみよう。



遺跡分布図

- | | | |
|---------|---------|----------|
| 1 戊立遺跡 | 2 寺ノ浦遺跡 | 3 久保在家遺跡 |
| 4 東反り遺跡 | 5 下原遺跡 | 6 古屋敷遺跡 |
| 7 不動坂遺跡 | 8 曲道遺跡 | 9 加賀田遺跡 |

^{いんたて}
戌立遺跡(滋野地区原口) 東部町の東端にあり、その東側の一部が小諸市まで広がる戌立遺跡は、昭和5年の発掘調査によって数軒分の敷石住居跡などが検出され、同時調査された小諸市の寺ノ浦遺跡と共に国史跡に指定されている。昭和58・59年に行われた範囲確認調査、昭和61・62年に行われた道路拡張工事に先立つ緊急発掘調査により、縄文時代中期中葉2軒・同後葉25軒・後期前葉3軒 合計30軒の住居跡と、200基程の土壇、数基の集石・配石遺構が検出された。

現在のところ、整理作業はほとんど行なわれていないため詳細は不明だが、調査時の所見からすると、中期末の加曾利EⅢ～Ⅳ式期が主体となるようである。住居形態は概ね直径5m程の円形を呈しているが、調査範囲が狭いため、柄鏡形を呈していたものも含まれている可能性は高いが、判然とはしない。昭和58年に検出された第5号住居跡は、中期末の加曾利EⅣ式期に属し、北西側の壁際に祭壇状遺構が構築されていた。これは、炉側に平石を2枚立て、床面より20cm程高く土盛りをした上に鉄平石を5枚平らに敷き、60cm×1m程の長方形に作られている。この脇から石皿や敲石などが出土しており、屋内祭祀の場所であろう。また後期に属する3軒の住居跡は、いずれも堀之内I～II式期の敷石住居跡であるが、一部のみの検出であるためプラン等は不明である。これらのほかに、100基以上の土壇や集石・配石遺構などが検出されている。このうちSK-01～04からは、後期中葉加曾利BⅠ式期の土器と共に、多量の獣骨・石棒数点が出土しており子孫繁栄を祈った祭祀遺構と考えられる。

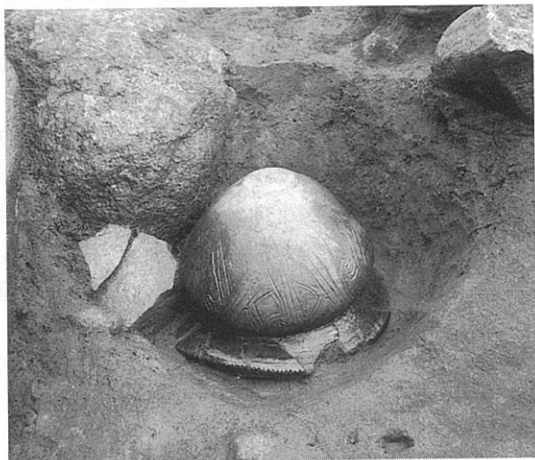
4回の発掘調査によって、8万m²に及ぶ広大な面積を有する大遺跡であることが判明した。このうち、国指定地を中心とする北東側の保存状態は良好であり、その中央部の窪地周辺に後期遺構が集中しているものと考えられる。

国指定地には、指定当時で作られた復原家屋が昭和30年ごろまでは建っていたが、崩壊してしまい現在は残っていない。昭和63年に、地元原口・聖区民の有志により、木の切り出し・茅刈りから鉄平石を敷くまで行なった敷石住居が、国指定地南隣の畑に建てられた。そして以前から行っていた国指定地はもとより、新しい復原家屋の周辺までを、原口区の老人会により毎年草刈り・清掃が行われている。国指定地の拡大・公有地化、さらには歴史公園化が切望されている。大石沢川をはさんで隣接している小諸市寺ノ浦遺跡と共に、保存・整備される日を心待ちにしているのは、私だけではなからう。

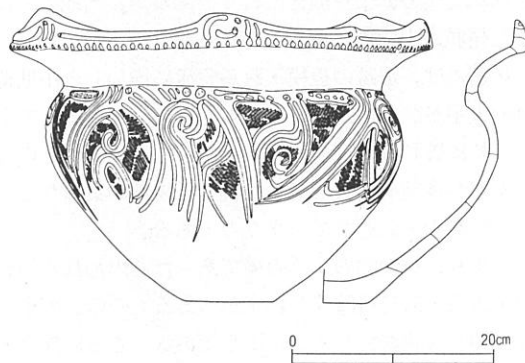
^{ふるやしき}
古屋敷遺跡(祢津地区新張) 町内最大の広がりをもつ扇状地である所沢川押出扇状地の扇央部に位置する古屋敷遺跡は、戌立遺跡の西側約1kmにあり、標高750～770mを測る。一帯の圃場整備工事が完了した現在でも、清らかな水が湧き出る泉を取り囲むように広がり、微地形などから4地点として把握される。

昭和59・60年と平成2年の3回にわたって行われた緊急発掘調査により、住居跡は縄文時代前期1軒・中期5軒・後期6軒、後期の配石墓・石棺墓・土壇墓等合計30基、中期から後期の土壇約120基、中世の墓跡等数基が発見された。

A地点は湧水東側に位置し、昭和60年に南側半分、平成2年に北側半分が調査された。昭和60年の調査で石棺墓3基と配石墓・土壇墓(伏甕2基含む)10基が弧状に並んで検出されたが、平成2年の調査で半円状に並んだ16基の石棺墓等の発見により、ほぼ環状に巡っていた墓域が想定される。そして、墓域を取り囲むように4軒の住居跡が検出され、小形の環状集落を呈していたと思われる。



古屋敷A地点埋甕No.3 埋設状況



古屋敷遺跡A地点 埋甕No.3

住居跡で最も遺存状況の良い S B-03は、4.2m程の主体部に3m程の張り出し部を持つ柄鏡形の敷石住居跡である。主体部の敷石は僅かに残存するだけで壁直上に角礫が並べられている。張り出し部は主体部より一段低くなっており、連結部には2個の立石があり、付近から石棒が出土している。出入口部に埋甕はなく、浅いピットが作られており、中から土器片などが出土した。

B地点は、湧水の南西側に広がる緩傾斜地で、かつて清水尻遺跡と呼ばれた場所である。調査は昭和59・60年に遺跡西側の一部で行われ、縄文時代前期から後期の住居跡5軒をはじめ、中期初頭と中期後葉を主体とした土壇約60基等多くの遺構が検出された。遺跡中心部は、現在も畑地として良好な保存状態のまま残されている。

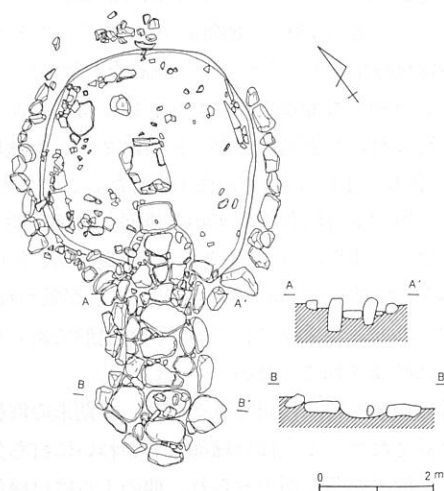
C地点は、A地点の西隣湧水の北側に位置し、昭和60年と平成2年に調査され、縄文時代中期後半～後期前半の住居跡3軒、屋外埋甕1基、石棺墓3基、土壇約40基が発見された。縄文時代後期掘之内式期に位置付けられる2軒の敷石住居のうち、1軒は柄鏡形を呈しており、張り出し部のみの敷石が完存しており、出入口部には石鉢が埋設されていた。

また、同様の石鉢が単独出土しており、同様な敷石住居跡が複数あった可能性が高い。長門町上ノ段遺跡においても、まったく同じ形態の敷石住居が確認されており、当地方の特徴であると考えられる。なお、もう1軒の住居跡は台形状を呈しており、町内では他に類例が認められない。

C地点北側に位置するD地点は、中～近世の集落跡と考えられたが、明確な遺構は検出されなかった。

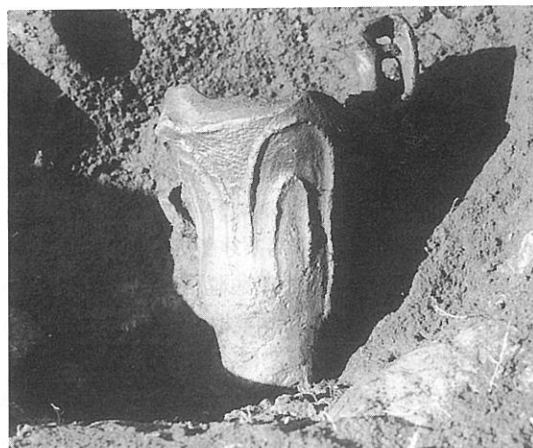
加賀田遺跡(祢津地区) 古屋敷遺跡の北東側約1kmに位置し、平成2年に発掘調査が行われた。標高800m前後にあり、縄文時代中期後葉から後期初頭を主体とした住居跡15軒と土壇約50基、集石遺構数基が検出された。住居跡のうち1軒が中期後葉の加曾利EⅢ式期頃で、他は中期末から後期初頭に限定される。このうち9軒が敷石住居跡であり、柄鏡形を呈している。整理作業は完了していないので確実ではないが、後期初頭称名寺式期の古い段階のものが主体を占めるようである。

部分的な調査であり、集落構造は明確に把握できなかったものの、短期間に営まれたため遺構の切り合いが少なく、遺物の変化・遺構の特徴を知る上で、貴重な発見である。未報告であるため、早急にまとめて調査報告をするつもりである。



古屋敷遺跡A地点 S B-03

なお、本地点と古屋敷遺跡のほぼ中間にある曲道遺跡からも、住居跡こそ発見できなかったものの、後期掘之内Ⅰ式期にはほぼ限定できる遺構と多量の遺物が検出された。三遺跡の相互関係に興味をもたれる。



加賀田遺跡 S K-21 土器出土状況

さくらいど

桜井戸遺跡(滋野地区桜井) 所沢川押出扇状地の扇端部が複合した標高570m～580mの地にある。昭和44年、信越線複線化工事に先だって発掘調査が行われた。線路敷という僅かな面積であったが、縄文時代中期末頃の住居跡3軒、平安時代の竪穴住居跡2軒、土壇12基(縄文時代6・中世6)などが検出された。このうち、第4号住居跡は縄文時代中期末から後期への移行期の敷石住居跡で、東西3.8m、南北3.1mの範囲に、川原石を主体として鉄平石も3割程度使用して石が敷かれ、その中央に石囲炉が構築されている。柄鏡形であったかどうかは確認されていない。

第3号住居跡も敷石住居と考えられ、中期末の埋甕2点が発見された。1点は口縁部をていねいに打ち欠き、上面に偏平な蓋石がのせられ、他の1点は口縁部を下にして埋めてあり、胴下半部を欠失する。

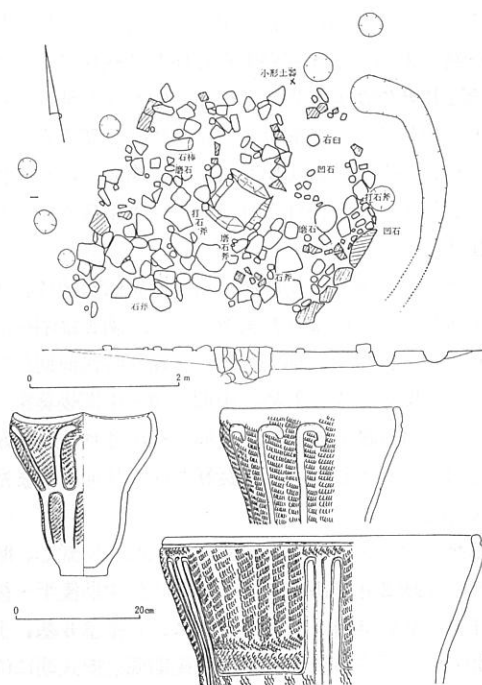
土壇のいくつかは、縄文時代後期中葉加曾利B式期に属するもので、精製の深鉢、鉢、注口土器、粗製の深鉢形土器などが多量に出土している。

調査地点は南端のごく一部であり、主要部分は畑や果樹園として良好に保存されている。上記の調査結果のみではやや不十分であるが、この地には、縄文時代中期末から後期中葉までを主体とする集落が形成されていたものと推定される。

東部町内の主要4遺跡の調査結果を中心として記してきたが、いずれの調査も充分とは言えず、不明な点を多く残したまま姿を消してしまった遺跡も少なくはない。しかし、戌立・真行寺・大川・桜井戸・伊勢原・若宮遺跡等主要部分を良好に残している遺跡も多くあり、今後の調査によって該期の様相がより明確になっていくことであろう。同時に、現段階で考えられうる前記した概要が、大幅に書き換えられる可能性も十分にある。

特に中期末以降の遺跡の選地・遺構の特異性などから、今まで見落としていた場所から思いもよらない遺構が確認されることもあると思われる。

たとえば、湧水やその周辺の低湿地、谷ぞいの傾斜地や谷底などからも実際に遺跡が発見されている例がある(明科町北村遺跡・群馬県月夜野町矢瀬遺跡等)。さらに、千曲川河岸段丘上や洪水が多発した扇状地上などにおいては、覆土・二次堆積土が厚い場所もある(海野宿北側の太平寺遺跡では、中世の遺構面まで1m以上もある。伊勢原遺跡では押し出した土砂が1～1.5m堆積しており、その下から縄文後期前葉の敷石住居跡が多数発見されている)。



桜井戸遺跡第4号住居跡・出土土器

こうした理由により、現在遺跡として確認されていない場所に、ひっそりと隠れている場合も考慮していく必要があるだろう。

今まで全体像があまり明確でなかった浅間山麓の縄文文化についても、最近の発掘調査により資料が急激に増加し、かなり明らかになりつつある。ハヶ岳南麓の縄文中期中葉から後葉にかけての文化に対して、やや見劣りのする感のあった当地方にも、ハヶ岳南麓とは異なった文化が立派に華開いていたのである。

東部町内はもとより、東信地方で盛んに実施されてきた圃場整備工事に先立つ発掘調査もほぼ終了し、今後、上信越自動車道などに関わる調査が増加するであろう。今までの成果を基にして、これからの発掘調査によって、該期文化の実情が明らかにされることに大きな期待がかけられている。そのためにも、既定概念にとらわれることなく、今後の発掘調査に新たな気持ちで取り組んでいく必要があると思われる。

なかほら

中原遺跡 東部町和に所在する中原遺跡は、烏帽子岳南麓の複合扇状地上、西は成沢川、東は金原川に挟まれた部分に立地している。

昭和27年には後期(堀之内式)の敷石住居跡が、昭和41年にも人骨の入った後期(堀之内式)の完形土器が発掘されている。いずれも現調査区の南側の下大川の集落内であり、後期の集落が存在することが考えられる。平成3年の東部町教育委員会による高速道建設予定地周辺の圃場整備に伴う発掘調査でも後期土器が出土している。

烏帽子岳南麓の複合扇状地は狭い尾根と沢が埋没していて複雑な状況を呈しているが、中原遺跡の今回の調査範囲内も尾根と沢が交錯し、集落は尾根の上に小規模ながらいくつか展開していた。過去の調査から、現調査区内で後期集落の存在が予想されていた。遺構や遺物の時期については今後の検討を待たねばならないが、現段階では前期の竪穴式住居跡が6軒と多く、中期3軒、後期は初頭の住居跡が1軒検出されたにとどまった。

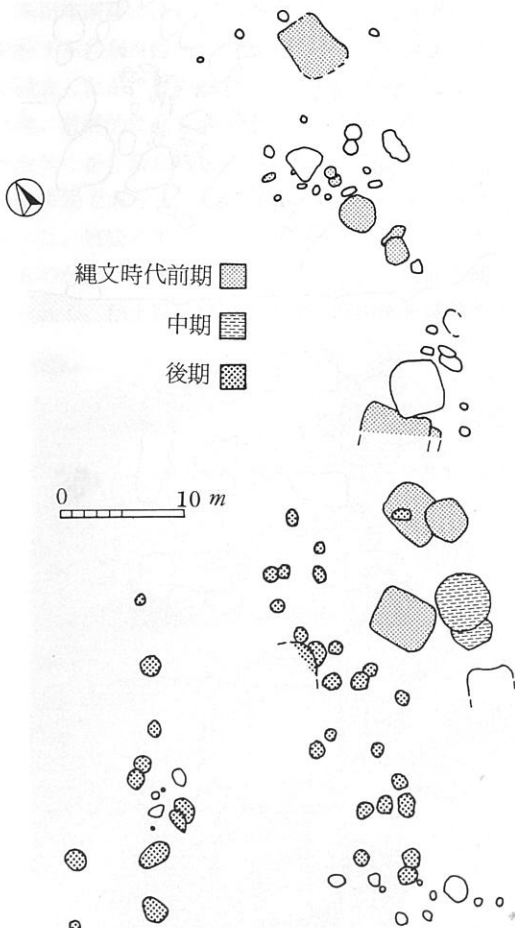


1 B地区縄文時代後期土器出土状況

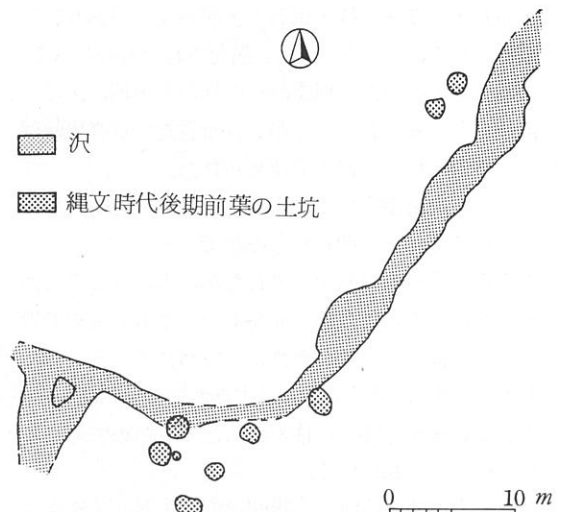
調査区内、西側の尾根(1 B地区)の平坦部には住居跡がまとまり、この尾根の西側斜面に径1 mの略円形の土坑群(約40基)が検出された。

そのうち約半分から土器が検出され、ほぼ後期初頭から前葉に属するものであろう。この尾根自体が水田造成時に削平されているので、検出時の土坑の深さはまちまちであるが、削平が少ない部分の土坑の深さは1 m前後もあり、断面形の立ち上がりはほとんど垂直である。また調査区中央の尾根と東側の尾根に挟まれた部分(2 A地区)には沢が埋没していたが、沢の周辺の低湿地から9基の土坑が検出された。この土坑内からはクルミなどの堅果類もみつかったことから立地などと合わせてこれらの土坑は貯蔵穴である可能性が高いと考えられる。この沢の中からは押し出し堆積による土壌や礫の間にまったく摩滅していない後期の土器が多量に認められ、おそらくこの沢の上手(調査区北側の現果樹園)にも後期の遺跡が存在していることが考えられる。

(長野県埋文センター 川崎 保)



1 B地区遺構配置図(1/600)



2 A地区遺構配置図(1/600)

小諸市の縄文中・後期遺跡

小諸市教育委員会 花岡 弘

なった上小教育会郷土史部員の皆さんの熱意によるものである点、高く評価されよう。

文 献

岩崎長思 1932 「寺ノ浦先住民居住居址」 『長野県史蹟名勝天然記念物調査報告 13』

上田三平 1932 「千曲川流域の印象」 『信濃』第1次第1巻第12号

藤森栄一 1970 「戌立と寺ノ浦——考古学的な問題について」 『長野県考古学会誌』 第9号

花岡 弘 1982 「戌立遺跡・寺ノ浦遺跡」 『長野県史 考古資料編 全1巻(2) 主要遺跡(北・東信)』



寺ノ浦遺跡 寺ノ浦遺跡は、小諸市の西部、三方ヶ峰から南に緩やかに傾斜する尾根上に位置し、標高は754～780mを測る。戌立遺跡とは、小さな谷を隔て、直線距離にして約500m離れている。

遺跡の範囲は、東西200m、南北700mで尾根に沿って細長く展開している。また、遺跡を挟んで東・西に湧水がある。

昭和初期、中央の研究者の指導のもとに、各郡下の教育会の教員が中心となり考古学的な調査が行われるようになる。当地方では、上小教育会郷土史研究部員により、戌立・寺ノ浦付近一帯にみられる石器時代遺物についての調査研究が続けられ、昭和5年5月に発掘調査が行われた。報告は岩崎長思氏によりなされ、昭和7年(1932)には県史跡、翌、昭和8年(1933)2月には国の史跡指定を受けている。

この調査では、炉跡2、柱穴3、鉄平石を用いた敷石遺構が検出されている。炉跡の数・規模から推して住居跡が重複していた可能性が高い。

一方、出土遺物には、縄文土器のほか、打製石斧・磨製石斧・石鏃・石棒・砥石・多凹石などがあり、自然遺物として、オオカミの牙と鑑定されたものがある。

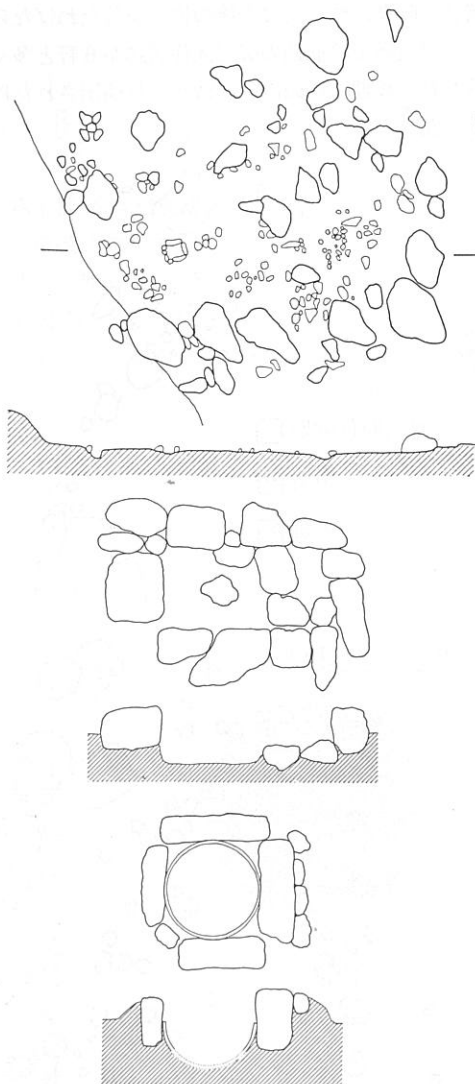
なお、寺ノ浦遺跡は縄文時代中期から後期にかけての遺跡として知られているが、分布調査では弥生時代後期、平安時代の土器片も認められた。

また、国史跡指定地より南の畑中には、岩崎長思氏により注意された大凹石が存在している。

調査後、上屋の復原がなされたが、当時はこの方面の研究が遅れていたため、北海道のアイヌの家を参考にして、熊笹を用いて行われたといわれている。

しかし、残念ながら落雷により壊れてしまっている。現在は、復原に際し、柱の台石とするために加工された石材が残されている。

戌立・寺ノ浦両遺跡は、浅間山南麓における縄文文化研究の出発点といえる。また、それは調査の主体と



住居跡と炉跡(岩崎1932より)

いしがみ

石神遺跡 石神遺跡は、小諸市の東北部、浅間山麓の南に傾斜する尾根上に位置し、標高は794～845mを測る。

古くからその存在が知られており、明治13年に出土した八満村の石神社の項にも、石鏃の出る事が多いと報告されている。さらに、昭和に入ると、八幡一郎氏の『北佐久郡の考古学的調査』に資料が掲載されているほか、島田和夫氏、岩崎長思氏が報告されている。

県営圃場整備事業に伴い、平成2年(1990)に遺跡の状況を把握するための試掘、平成3年(1991)にその結果をもとに本調査を行なった。

遺跡の形状は、ほぼ中心に湧水があり、南に開口する馬蹄形を呈すると言え、調査はその西側部分にあたる。また、調査前の段階では、一見、一つの尾根と考えられていたが、その中にもいくつかの谷が存在したことが判明した。なお、遺跡の時代は、縄文、弥生、奈良・平安時代、中世であるが、ここでは縄文時代に限って述べることにしたい。

遺物では、早期の土器が出土しているが、住居跡が構築されるのは前期の関山期からである。

続く中期は空白となり、再び住居が構築されるのは後期の堀之内期からといえ、敷石住居跡も認められた。



住居跡以外では、土壇墓、石棺墓、配石遺構などがある。墓壇は、土壇、土壇の壁に数点石を配すもの、石棺の三種に大別される。

埋葬では、頭部に浅鉢をかぶせた例がいくつか認められたほか、通常では、一つの墓壇に1体を埋葬するのが一般的と考えられるが、2体埋葬した例も存在した。また、墓壇の大きさから推して、遺体をそのまま埋葬したとしてもとても収まりきれない例、さらに遺存状況を考慮しても全部がない例もあり、再葬を考えざるを得ない例が認められた。

配石遺構も後期の所産と考えられるが、谷地形を意識して造られたと思われる。また、配石中には石棺もあり、石棺同士でも先後関係のあるものが認められた。

このほか、特異な遺構として、土壇内中央部に炉を設けているものが1例検出されている。

出土遺物には、土器・石器のほか、土偶、耳飾、ヘアピン(骨角器)、貝製・ヒスイ製垂飾など、自然遺物として、獣骨・貝殻などがある。

このうち、ヘアピン、貝製の垂飾、貝殻については現在、鑑定を依頼中である。

石器では、石鏃が多く、打製石斧が極端に少ない。

また、石材では黒曜石、黒色の安山岩などのほか、群馬県の牛伏砂岩製の砥石が一点出土している。



配石遺構

郷土遺跡 郷土遺跡は小諸市大字甲字中郷土他に所在し、浅間火山の南裾部の標高約830mを測る緩斜面上に位置する。過去、昭和36年と40年の2回にわたり東京教育大学の八幡一郎教授によって発掘調査が行われており、全国的にも早い時期に柄鏡形敷石住居跡が検出されるなど多大な成果があげられ、縄文時代中期文化の代表的な遺跡として全国的にもその名は高い。

この郷土遺跡を上信越自動車道が通過することとなり、それに先立ち県埋蔵文化財センターでは平成4年度と5年度の2ヶ年にわたって約8,000㎡の発掘調査を行うこととなった。

今年度は工事用道路分及び小諸市側道拡幅部分の計1,780㎡の調査を実施した。東西に長い部分的な調査ではあったが、縄文時代の住居跡33軒、屋外埋甕8基などが検出され、縄文時代の集落遺跡の断片を垣間見ることができた。時期的には縄文時代中期中葉～後葉にかけて最も集落が盛行したものと考えられるが、土器には縄文時代前期～後期及び平安時代のもも認められる。

遺構の密集度は極めて高く、土器などの遺物量も非常に多い。中でも14号住居跡は土器の遺存状態が良好であり、当時の生活の様子がありありとかがえる。14号住居跡は南東部が削平を受けているためプランは不明確であるが、径約5.6mの円形を呈すると思われる。炉は石囲炉であり、炉内には土器が埋設されていた。また炉を覆うように大きな平石が存在しているがこれはおそらく住居廃絶の際に意図的におかれたものと考えられよう。さて本住居跡で特筆すべきはその土器の出土量である。ほぼ完形の土器がおよそ30点近くみられ、いずれも「廃棄」したというよりも「置き去り」にしたと考えられる出土状況である。この良好な一括資料は浅間山麓における当該期の編年にはもちろん、その社会構造を理解するうえでも大きな意味をもつものと思われる。



S B14 遺物出土状況



S B24 炉内(石棒)出土状況

また、本遺跡の特色のひとつとして埋甕の多さがあげられよう。埋甕は計12基が確認されている。そのうち住居跡に伴うものは4基であり、他は屋外埋甕である。遺物としては他にも多量の縄文土器をはじめ、土鈴、垂飾り、土偶、石棒など多岐にわたってみられる。石棒は炉の縁石として用いられたものが2例認められている。

本年度は、小諸市教育委員会によって民間会社の駐車場移転建設に伴う発掘調査が高速道路用地に隣接した地点で行われ、敷石住居跡を含む縄文時代中期から後期にかけての住居跡7軒などが検出されている。

このような今年度の調査知見から推測すると、5年度調査予定地は郷土遺跡の中核にあたると考えられる。そして従来の子想を越える大集落遺跡である可能性が高く、この2ヶ年にわたる発掘調査によって浅間山麓における縄文時代中期集落の中心的存在である郷土遺跡の全貌が明らかにできるものと思われる。

(長野県埋文センター 桜井 秀雄)



S B14 土器取り上げ作業

岩下遺跡 浅間火山の裾野、南北走行の尾根南端に営まれた遺跡である。小諸市八幡に所在し、標高は780m前後を測る。これより南方は、走行方向を南西に変える田切り地形が発達するが、この田切りを挟んだ眼前の台地上には三田原遺跡群が位置している。距離にして150mも離れていない。

遺跡の南寄り部分が調査対象となり、約10,000㎡の範囲を今年度調査した。縄文中・後期関連では、三田原遺跡群同様、中期末葉から後期前半のものが認められ、また遺跡内容の主要でもある。竪穴住居跡では、中期末葉9軒・後期前半31軒を数え、土坑に至っては数百基と夥しい数に上った。該期集落の中心部が調査対象になったといえる。

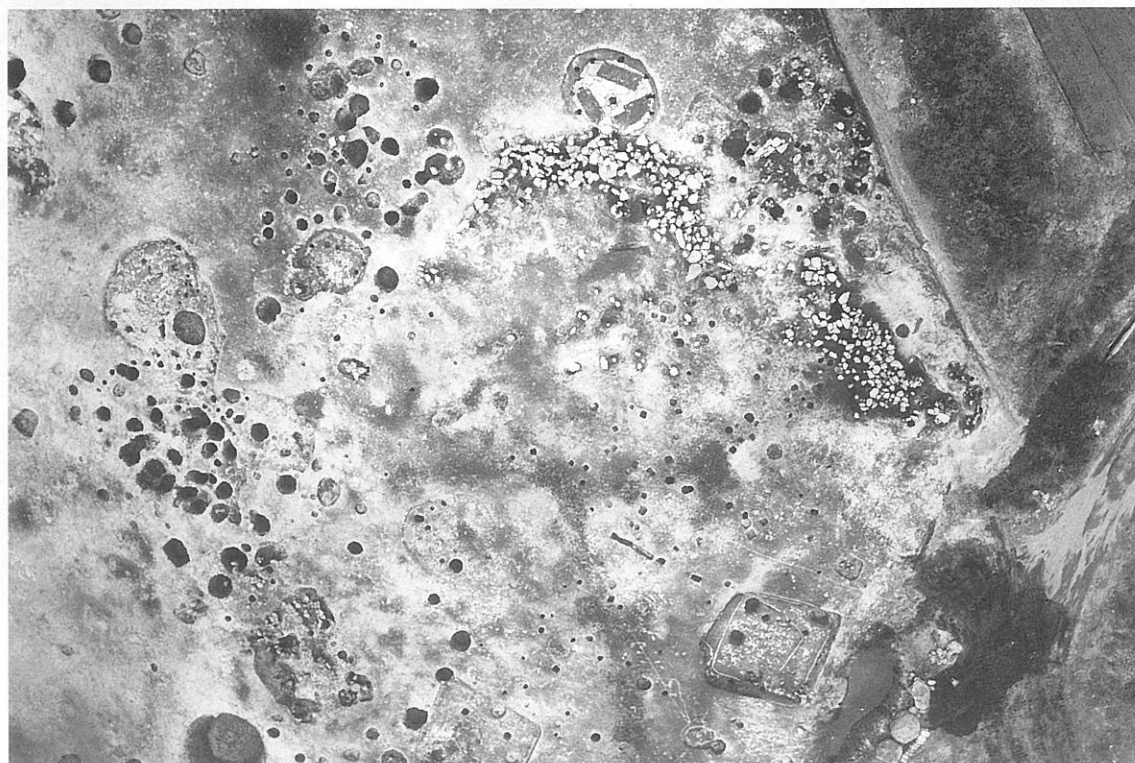
中期末葉から後期初頭(称名寺式期)の集落は、三田原遺跡群にはほぼ併行して営まれたものと考えられる。ただし、広域を調査したにもかかわらず、遺構密度は低く、規模的にはそれよりもかなり劣るらしい。大きな成果はないが、直径3mにも満たない中期末葉の敷石住居跡2軒、柄部に石積みの壁体を残す後期初頭の柄鏡形敷石住居跡1軒が認められた。

続く後期前半、堀之内Ⅰ式の段階の住居跡は見当たらず、土坑を幾つか確認したに留まった。調査区外に住居が分布する可能性を残すものの、遺構外出土遺物

をみても客体的存在にすぎないため、小規模かつ単発的な集落しか期待できそうにない。

堀之内Ⅱ式段階になると、集落規模が飛躍的に増大し、しかも、小規模ながら明らかに環状配列を意識した遺構群が確認された点で特筆される。この環状集落は、北端中央に大形敷石住居を設け、その両翼にもはや柄部と称するには相応しくないような大規模な石積みをも有する敷石住居を従わせて、サークル構造の中核とし、これを円弧の基点として、直径25m程の平坦な無の空間を設けるものであった。この円弧の西中央には貧弱な竪穴住居、南西には大形敷石住居、その東側に竪穴状の遺構を配し、これとともに土坑群が取り囲むなど、遺構配列状況が明瞭に捉えられたことも大きな成果であった。また、同一地点で頻繁に建て替えを行った住居が目立ち、当初に設定した配列を代々踏襲している事実も判明した。これとは別に、南方にも石列を伴う敷石住居跡群が分布し、北西方向の遠い地点には平地式の敷石住居跡が単独で存在していたが、これらが一体となってひとつのムラを営んでいたのだろう。当該期の集落構造を考える上で非常に興味深い資料といえる。

(長野県埋文センター 宇賀神 誠司)



縄文時代後期前半の環状集落跡

^{さんだはら}
三田原遺跡群 浅間火山の裾野から南東方へと下って行く細長い台地の上に営まれた遺跡群である。小諸市平原に所在し、同市八幡から御代田町塩野地区にかけて、集中的に分布する主だった縄文時代関連遺跡の中では最南端の位置にある。

遺跡範囲は長さ1km程に及ぶが、そのちょうど中央に位置する狭隘部(幅約80m)を調査した。縄文中・後期関連では、中期末葉の竪穴住居跡9軒、同遺物溜まり1ヵ所、後期前半の竪穴住居跡8軒、その他土坑26基を検出している。

中期の集落は、末葉でもその最終末に位置づくもので、後期集落との連続性が考えられるものであった。検出遺構数はわずかだが、調査区周辺の遺物散布状況からすると、該期集落の中心は遙か西方にあるらしく、調査対象地点はいわば集落の縁辺部に相当する公算が大きい。不明な部分が多いなか、ただ言えることは中期最終末、そして後期初頭へと存続する集落跡としては、当地域を代表する遺跡のひとつに違いないということである。

後期前半の集落は、称名寺式期と堀之内I式期のものが認められた。中期同様、集落域のほんの一端を垣間見たにすぎないが、ともに今後の該期集落研究に多大な影響を及ぼすほどの、重要な知見を得ることができた。

まず、称名寺式段階では、保存状態が極めて良好な柄鏡形敷石住居跡の発見にある。その柄部には、軽石を主材とした石積みが見られ、なおかつ一方の側壁に偏平な河原石を利用した階段状施設を有していた。この階段状施設の両サイドにも、通路の如く外側へ若干張り出した格好で軽石による壁体を設けており、住居

の出入口施設をも兼ね備えた構造物であることが明白である。これによって柄部の役割をすべて解明したことにはならないにしても、ひとつに出入口として機能していたことは明らかで、また、出入口方向をなにも柄部正面方向ばかりに想定しなくともよいことが判明した。

堀之内I式段階では、岩下遺跡で認められたミニ環状集落に一步先行同類の集落跡を確認した。東半部を調査しただけだが、著しく重複する大形敷石住居跡(写真中央奥)の東隣に、やはり建て替えを繰り返した石列をともなう柄鏡形敷石住居跡(写真右上)を配し、これら中核部を基点とする円弧東中央に貧弱な竪穴住居跡が存在するというように、住居の配列構造は岩下遺跡とはほぼ等しい。さらに、緩斜面をカットして石列を構築する方法やサークル内部を無の空間とする使い方など、まさしく瓜二つの基本構造を呈している。サークル径は内法で40m内外が見込まれ、この点では、岩下遺跡の規模を若干上回る可能性が大きい。いっぽう、大きな違いとしては、大形住居に従うような配置状況にある柄鏡形敷石住居の柄部構造が挙げられる。ここでは、規模で主体部を凌ぎ、サークル内にそのまま開口する半円形の形状ではあるが、一応柄部としての形態をなおも維持し続けており、柄部と石列の区別がない岩下遺跡例との差は大きい。しかし、これは微妙な時期差に起因するものと思われ、その意味では、柄鏡形敷石住居の構造的な推移を探る上で興味深い資料となりえよう。

(長野県埋文センター 宇賀神 誠司)



3号住居跡



石列を伴う敷石住居跡群

御代田町の縄文中・後期遺跡

御代田町教育委員会

小山 岳夫・堤

隆

滝沢遺跡 町内塩野地区に所在する。浅間山を基点に幾筋も刻まれた細尾根の一つ標高850m内外の地点に立地する。

縄文時代前期前半・中期後半～後期前半・平安時代の複合遺跡であるが、遺跡の最盛期は縄文中期～後期にある。

平成4年度北大井地区総合整備事業に伴い、約3.5万㎡が発掘調査された。

以下、今回のテーマに沿って縄文中・後期の遺構・遺物の概略を記しておく。今回の調査では集落の南端部と、3群からなる墓域が把握された。竪穴住居跡は7軒検出され、内、4軒が敷石住居である。平面形態は隅丸方形で柄部は確認されなかった。

墓域は人骨が遺存しているものが少ないが、土坑墓が主体で他に土器棺墓・配石墓も見られる。配石墓内からは、非常に残りの良い成人骨(右下写真)が出土した。また、D-30号土坑(左下)内には多量の焼骨が散乱しており、配置された石の下に滑石製のペンダント(中央下)が置かれていた。この墓の上には祭祀的な性



滝沢遺跡の敷石住居跡(左からJ-8・9・10号住)

格が強いJ-3号住居跡(右下)が構築されている点も注目され、墓域内でも特別扱いされた墓であったようだ。この他、土器棺墓も10基程検出された。

遺物整理は始めたばかりで、遺構群の詳細な時期判定はこれからである。平成5年度は集落の中核部分の調査も予定されており、今後の進展に期待されたい。

(小山)



J-3号住居跡出土土器



D-30号土坑の上につくられたJ-3号住居跡(仮称)。北側の石組内から秀品の称名寺式土器が出土した。



焼骨が散乱していたD-30号土坑。石を取りはずすと彫刻入りの石製ペンダントが出土した。(右写真)



D-30号土坑出土滑石製ペンダント



D-60号土坑から出土した成人骨



宮平遺跡の敷石住居跡

^{みやだいら}
宮平遺跡 森泉山麓、湯川左岸の河岸段丘上に位置する宮平遺跡は、やや上流に位置する軽井沢町茂沢南石堂遺跡と並んで縄文中期から後期にかけての遺跡としてその遺物量の豊富さで著名である。宮平遺跡は、昭和初年にNGマンローや八幡一郎などによる調査なども行なわれ、学史的にも古くから知られている遺跡である。

1981年に行なわれた農道舗装工事の際の調査では、敷石住居7軒を含む27軒の竪穴住居跡や4基の石棺墓などが検出されており、縄文中期後葉加曾利E3式から縄文後期堀之内I～加曾利BII式段階までの土器群が充実して認められ、良好な資料といえる。また、ゴミ穴と考えられる土坑からは、シカ・イノシシ・クマ・カエルなどの骨が出土しており、その食生活の一端を推定できる貴重な資料となった。



宮平遺跡 堀之内I式土器



加曾利BII式土器

^{かわらだ}
川原田遺跡 川原田遺跡は、浅間山麓の標高約900mの舌状台地上に位置する。検出されたのは、縄文前期・中期、平安の集落である。このうち縄文中期では中葉から後葉にかけての住居跡46軒が検出された。

中期中葉の集落では、いわゆる新巻類型や焼町類型の土器が主体的に出土し、これに勝坂系・阿玉台系の土器が共伴した。環浅間山麓に分布するかかる土器群の本遺跡での充実度には目を見張るものがあり、整理研究を通じてその型式学的理解や編年をより深化させることが可能となろう。あわせて、当該期の集落構造の一端も明らかにされることが期待される。

また、中期後葉では、加曾利E1・2式の土器とその住居が認められている。

調査報告書は平成7年刊行予定である。（堤）



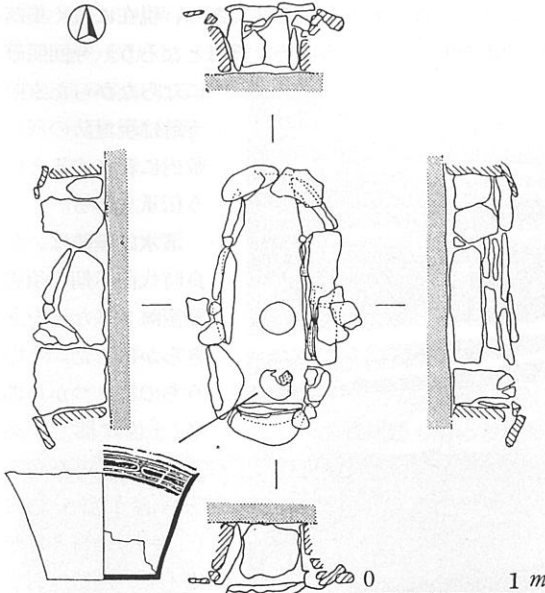
川原田遺跡と焼町土器

もどろみいしどう

茂沢南石堂遺跡 軽井沢町の南西部に所在する茂沢南石堂遺跡は、浅間山の南麓の湯川とその支流茂沢川に切られた台地上に立地している。

昭和33・34年の県道改修工事の際に遺物が出土し、昭和36～41年に5次の調査が、昭和52～55年の間に3次の計8次8地点の調査が行われた。

第1次発掘調査時から縄文時代中期～後期の遺構が検出され、特に後期の石棺墓を含む配石遺構が注目された。この石棺墓からは加曾利B式土器が伏せられて出土し、いわゆる「甕被」葬と考えられよう。

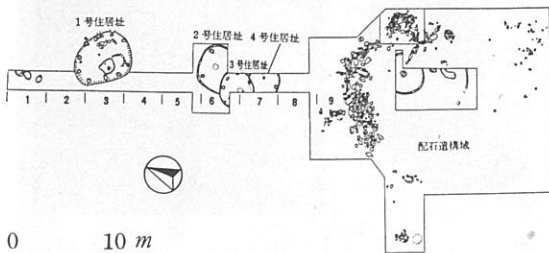


第1地点 石棺墓(1/50)

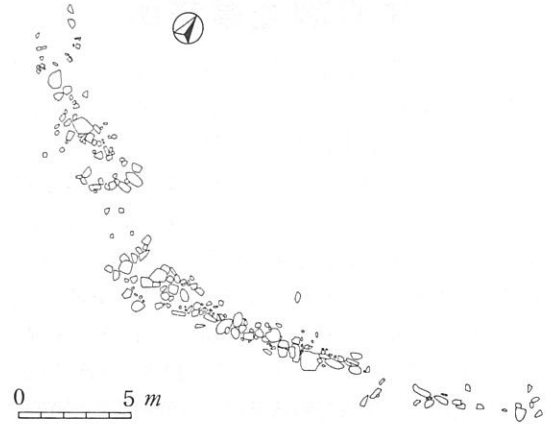
その後の調査で第1地点を拡張した結果、下図のように配石遺構は弧を描いていることが確認された。

また、第3地点でも環状列石や柄鏡形敷石住居などが検出されている。報告者によれば第7次調査の際、列石周辺より、第5群土器(茂沢タイプ)の把手部ばかりが多く出土したという所見があるが、同じ縄文時代後期の埼玉県赤城遺跡等にもこうした把手が集石などに集中する事例があり、興味深い。

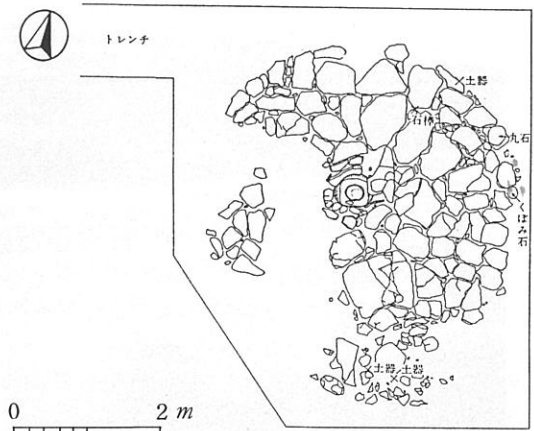
また、当遺跡の資料をもとに堀之内I式直前の土器として「茂沢タイプ」が提唱された。



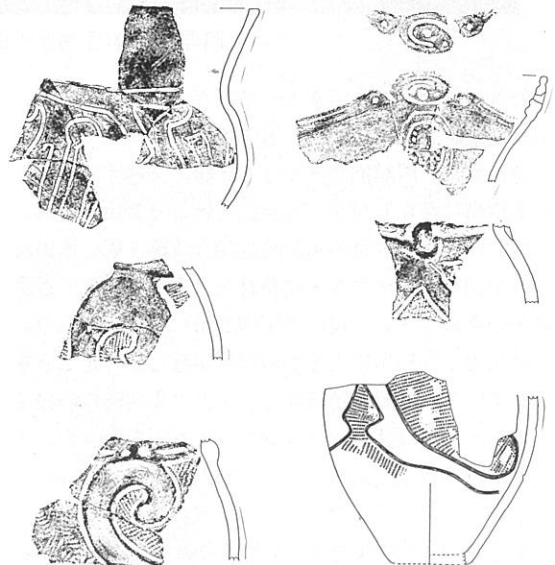
第1地点 配石遺構(1/800)



第3地点環状列石



柄鏡形敷石住居跡(1/100)



「茂沢タイプ」とされた土器
(図は調査報告書より作成)

(長野県埋文センター 川崎 保)

中野調査事務所

昨年度、長野調査事務所中野支所の設置により開始された上信越道および志賀中野有料道路関係の調査は、今年度、中野調査事務所に組織替えされて行うこととなった。発掘調査は昨年度に引き続いて上信越道中野インター予定地内の窯跡群および志賀中野有料道路の栗林遺跡で継続され、今年度初めて上信越道の小布施町内で行われた。これにより、昨年度から継続の上信越道須坂長野東・中野インター間、志賀中野有料道路関係の発掘調査のうち、当センター担当分は終了した。

小布施町の飯田古屋敷遺跡は中世飯田氏の居館跡と



玄照寺跡遺跡(上方が千曲川)

いわれていたところである。本調査前の試掘により、遺物が確認されていたが、遺跡の性格については疑問が持たれた。居館推定地では、居館に関連すると思われる遺構は存在しなかったが、それより2mほど低い低地部において近世の木製品を伴う流路・溝、水田跡などを調査し、漆塗碗・建築材などを出土した。近世後半の水田でさえ、現地表下約2mに埋没しており、千曲川および松川による堆積作用が激しかったことを示している。玄照寺跡遺跡の中・近世集落跡に隣接する場所で近世以降の流路変更や土地利用をあきらかにしたことは貴重である。居館跡は調査区域内には存在しなかったが、周辺の方田地割や堀状の水路などから見て今回調査地の東方に可能性を指摘できる場所がある。

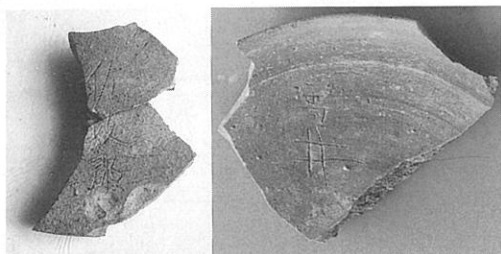
玄照寺跡遺跡は、近世初頭の寺院跡とされ、飯田古屋敷遺跡の北側に隣接する。本調査前の試掘で五輪塔や火葬施設が確認されていたが、寺院に直接結びつく

遺構はあきらかではなく、その周辺集落であるかもしれない。遺跡は松川扇状地末端部の千曲川支流の埋没した小流路に挟まれた幅100m程の範囲であり、東方の扇状地上流部、西方の現堤防下へ広がっている。ほぼ正確に東西南北方向の溝で区画された数区画分と考えられる屋敷地を調査し、掘立建物・井戸・火葬施設などを検出した。遺物は16・17世紀を主体とする陶器・木器などであり、遺構の重複とあわせて、数時期にまたがりそうである。調査地は千曲川築堤以前は現河川敷まで広がる大島集落およびその畑地であり、当地方における調査例も少ない時期であり、現在に続く集落の変遷を明らかにする重要な資料となろう。今回明確

にならなかった玄照寺跡は現堤防の河川敷内に存在するという伝承もある。

清水山窯跡は、奈良時代前半期の須恵器窯跡3基などをあきらかにした。そのうちのひとつから郡名(「佐玖郡」「高井」?)表記の文字資料各1点・記号(「#」)資料多数が出土し、供給地および生産組織などを解明する貴重な資料で

ある。とくに、隣接郡といえる距離を越えての「佐玖郡」の表記は佐久郡内における「#」資料の存在とあわせて関連がうかがえ、興味深い。また、調査した3基の窯は周辺でも最大規模の窯である。隣接して数基の窯跡の存在が、試掘により確認されているが、5年度に中野市教委が調査する予定である。



清水山窯跡の文字資料(左:「佐玖郡」、右:「高?井」)



清水山第3号窯

池田端窯跡は清水山窯跡と同じく中野インター内に位置する。奈良時代・平安時代の瓦窯・須恵器窯7基を調査したが、そのうち瓦窯は須恵器窯として操業した後、最終的に瓦を焼いている。平瓦・丸瓦のみで軒瓦を欠くが、奈良時代前半期と考えられ、供給地の解明が課題であろう。窯跡のほか、粘土採掘坑を多数調査した。坑底に半完形の須恵器横瓶・甕などを出土するものがあり、窯跡とはほぼ同じく奈良時代前半期と考えられる。粘土採掘坑は昨年度、沢田鍋土遺跡で4世

紀代の、今年度、清水山窯跡で縄文時代と思われるものを調査している。また、草間窯跡群における窯跡の調査は3・4年度で計13基になり、とくに奈良時代の充実した資料を得た。沢田鍋土遺跡の隣接地で、中野市教委が奈良時代の住居跡を調査しており、これらの関連遺構とあわせて、一貫した須恵器生産工程をあきらかにできよう。

栗林遺跡では、昨年度に続いて、縄文時代後期の貯蔵穴群、長野県史跡栗林遺跡の弥生時代集落の外縁部に位置する弥生時代中期の掘立建物群・土坑群、これとは約1km離れて、別の弥生時代中期・古墳時代・平安時代の集落・中世居館跡にかかわると思われる大溝などをあきらかにした。中期の掘立建物は1×1～5間で、9棟が史跡内竪穴住居群の外郭にあたると考えられる部分に集中する。その分布は円環構造を示す可能性があり、史跡指定地の中期集落の構造を考える上で

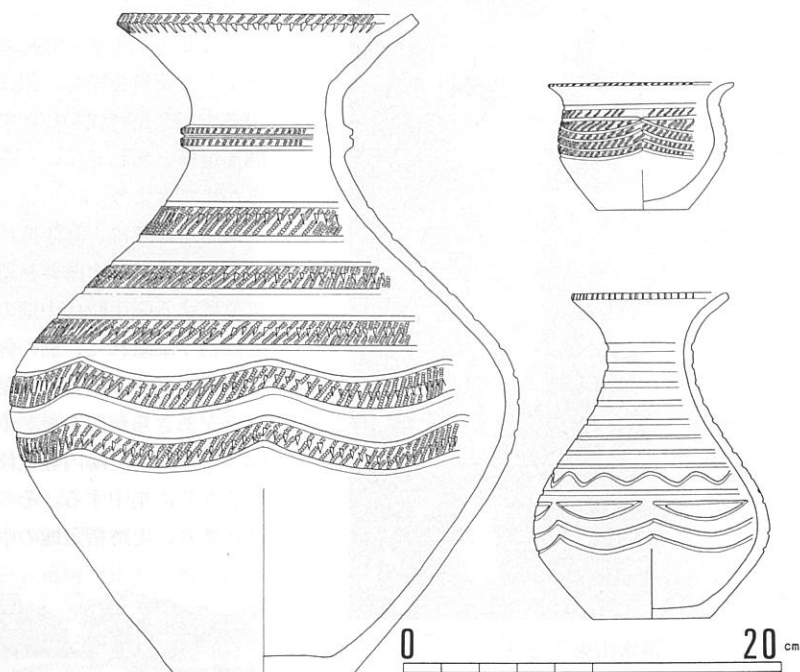


上
栗林遺跡の弥生時代
中期の掘立建物群



左
池田端窯跡の粘土採
掘坑群

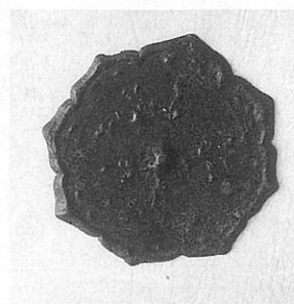
興味深い。また、これと同一地区に分布する井戸状土坑は再葬墓の可能性もあり、掘立建物群と相互の機能的関連も考えられよう。これらの土坑中からは栗林式の壺が多出しており、編年資料としても貴重である。一方、北地区であきらかとなった中期集落は、史跡指定地の集落とは別であり、距離約1kmの同一時期のムラの相互関係は注目されるところであろう。ここでも栗林式・古式須恵器などの良好な資料を得ている。縄文時代の低湿地遺跡として注目された後期



栗林遺跡②区11号住居跡の一括土器(※伴出土器は「年報9」に収載)

の貯蔵穴群は今年度も継続して調査され、その分布を広げた。トチなどあく抜きを要する食用植物資料を土坑などから出土している。また、湧水利用施設と考えられる板囲い遺構は昨年度に接続する部分が確認され、その流水下流部に貯蔵穴が収集して分布し、両者の関連がより明確となった。これまで不明確であった栗林遺跡の内容は、二年にわたる調査によって、当初予想された弥生時代ばかりでなく、縄文時代も含めて、その全体像にせまる糸口をつかんだといえよう。また、縄文時代の集落と貯蔵穴・食料加工場を一体として調査したことも貴重な調査例となった。

中野市職員の派遣も得た、いわゆるオリンピック道路関連の中野市内の調査は今年度で終了し、3年度調査の七瀬遺跡とあわせ、平成5年度には報告書刊行の予定である。また、上信越道の調査は次年度以降、中野以北が中心となり、信濃町地区では大遺跡が多いことが予想されている。



栗林遺跡出土の八稜鏡

栗林遺跡の縄文時代貯蔵穴群

長野調査事務所

前号以降新しく判明した成果を中心にした調査の概況と、報告書刊行を目前にした北村遺跡を中心にした整理の概況を報告する。

春山B遺跡では、弥生時代の集落の縁辺付近から、前期末～中期初頭に属する再葬墓の可能性の高い土壇1基が発見された。人骨らしい骨と土器数点を伴っており、自然堤防上に立地する稀有な例として注目される。

榎田遺跡の河川跡とみられる湿地から古墳時代中～後期に属する大量の木製品が出土していることは既に報じたが、調査が進むにつれ驚くべき内容をもつことがわかってきた。なすび形の鋤や膝柄股鍬^{えぶり}、扶や堅杵などの農具類は今までも発見例があったが、高床倉庫の階段や同じく観音開きの扉などの建築材、^{かぜい}杵やタタリなどの紡織具や織機の部材、黒漆を塗布した弓、鞍の後輪^{しずわ}や鎧、鳥形木製品等々、多種多様な遺物があり、中でも扉や漆塗の弓、武器・馬具等は全国的にみても出土例がほとんどない。東国の辺地からの発見により、地域史のみならず日本古代史の再検討が迫られるものと期待される。



榎田遺跡出土鳥形木製品

榎田遺跡は弥生時代中～後期の大規模な集落でもある。中期に属する竪穴住居3軒からは石包丁、太形蛤刃石斧を含む各種磨製石斧、石戈などの未製品や欠損品、原石や石屑、台石が多出しており、石器工房の性格を持つ。集団内での分業を問う好資料である。又、後期に属する土坑・SK16700からはコンテナ数杯分に



榎田遺跡の石器工房(SB1471)

も及ぶ炭化米が出土した。貯蔵方法や管理を考えさせてくれる資料である。

清水製鉄遺跡は平安時代の製鉄関連遺構に加え、7

世紀後半頃の古墳1基が調査された。円墳で直径10m、三重の石積みの上に盛土する。横穴式石室は全長7m、築造手順が読みとれて興味深い。8世紀代まで追葬をしているが平安時代に至って鉄滓等が投入されており、製鉄を行なった人達によって部分的に壊されたようだ。刀や玉類、須恵器など副葬品の一部は残っていた。

更埴条里遺跡では9世紀代の水田域・集落域を区画する大畦畔と水路が確認された。またそれ以降は後背地側に集落が拡散することがわかってきた。その下層からは縄文時代晩期前半及び後期前半の包含層が発見された。いずれも焼土や炭化物の集中箇所と土器片や打製石斧等の散布箇所から成り、散漫で遺物量も少ない。自然堤防周辺の土地利用について考えさせられる資料である。

屋代遺跡群は中世・平安時代に続いて古墳・弥生時代の集落の調査が進展した。同期の集落は屋代遺跡群の北端を区切る自然堤防頂部から後背地側へ約100m程の幅をもって带状に展開する模様である。平安時代以降のように後背地側へ集落が進出することはないのかも知れない。ただこの集落域から後背地側へ600m程入った地点で古墳時代中期の大規模な溝が発見されており、注意を要するだろう。



屋代遺跡群の古墳時代～古代集落

屋代遺跡群の調査終了寸前に発見された縄文時代中期後半の包含層は我々を大いに驚かせた。地表下4m、弥生時代の遺構検出面より2m以上の間層を挟んでおり、最大層厚1m、場所によっては大量の土器を含んでおり集落の存在が確実視される。同時期には現在とほとんど変わらない位置に自然堤防状の微高地があったらしく、その頂部よりやや下がった位置に厚い包含層が形成されるようだ。沖積低地の集落は調査例が少なく、5年度の調査が大いに注目される。

新幹線関係では仮称篠ノ井～川中島間⑦・川中島駅構内地点が調査された。近世の水田跡を発見する等成果をあげたが、JR線隣接地の調査は安全確保上の課題が大いことを認識させられた。

縄文人骨300体が出土した東筑摩郡明科町北村遺跡の発掘調査報告書が刊行される。体裁は、本文編440頁・図版編260頁の二分冊、合計700頁余りとなる。本文編は、第一部考古学以下形質人類学・環境生態学・考察の4部に分かれ、図版編は、遺構・遺物の各実測図版と写真図版で構成されている。刊行までの歩みを中心に据えながら、今後解消していくことが望ましい課題に触れ、最後に成果の要点を簡単に紹介する。

発掘調査は1987年4月から翌年9月までの18ヵ月間、断続的に行われた。酷暑あるいは厳寒の中、黙々と作業をお手伝いして下さった方々には、今さらながら頭が下がる。この間の経過は第一章で述べているが、文化財保護と地域開発との共存を願う想いを記するには、あまりに紙数が少ない。調査方法の記載は、近年慣習となっているが、今回は調査現場の保守や周辺への安全対策についても一項を設けてみた。目玉となる人骨は、現場での取扱いから整理分析に至るまで、写真を挿して解説している。分析は、獨協医科大学・東京大学・明治大学に負うところが大きい。また影にあってクリーニング作業を行ってくれた方々の御苦労は貴い。事務所の一部改装を行い、台車をはじめ必要物品を調達し、専門家から講習を受けて作業を始めたが、対象が人骨だけに、竹串やメスを握る手にも自然緊張感が走る。一体分を完成させるたびに安堵の想いに浸れるものの、これが百数十体分、およそ一年間繰り返されたのである。

1991年、長野道・上信越道の調査が東北信地域で盛期に入るが、その余波はやはり整理作業に及んだ。事務所の統廃合を経て、ともかくも作業は継続されたが、ここでもやはり輝きがあふれていたのは補助員の方々である。北村遺跡など見たこともなく、テンバコにして700箱の縄文文化に接したのも初体験だった。時として担当の酷な指示にも適切な処理をして下さったの

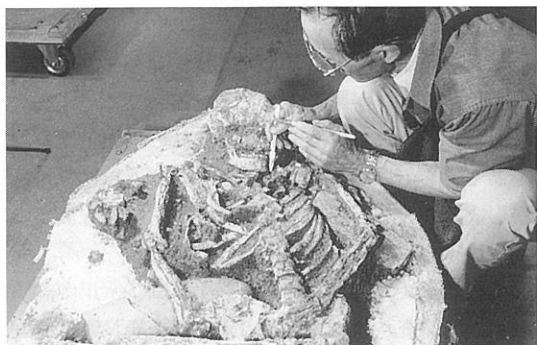
は、いつしか遺跡と一体になっていたからではなかろうか。

刊行を一年後に控えて本年度から作業は追込みに入った。この頃までには縄文時代の石器や古代以降の担当に加え、写真専従のスタッフがついた。やっと整理はんらいの姿に近づいたのである。

続いて資料の収納が始まる。これが完成して北村遺跡の整理作業は一段落ということになろう。私たちの調査は現在記録保存が主流である。それを前提にした時、いつ誰が来てもすぐ見られる状態で資料を納めておくことが、おそらく最も重要なのであろう。報告書は、その過程での表現形にすぎないのではなかろうか。整理作業全体の位置づけ、その中での報告書や収納などの意味について、発想の転換がせまられている。

さて、今回の調査では、今から3800年前を前後する縄文時代中期末葉から後期前葉の中部内陸における状況を一定程度明かにし得た。彼らは、植物質食糧を主要な栄養源とし、採集活動を生業の根幹に据えて暮らしていた。厳しい自然環境とその変化を精神面で支えたのは、“敷石住居”という新種の住居だった。日常生活領域が半径2km程度だったとしても、北村に形成された墓群は、それを越えたムラ同士の交流が婚姻や葬儀の中で繰り返されていたことを物語る。さらに祖先崇拜の存在についてさえ暗示的である。こうした社会体制の形成は、ひとり北村遺跡周辺に限定されず、中部関東の内陸圏通有の出来事だったと思われるのである。中でも、千曲川本支流沿いに展開する遺跡は共通項が多い。そこでこれを井戸尻文化に続くところの“北村文化”という名で呼んでみたいと思う。

最後に、これまで御指導下さった県内外の研究者の皆さん、惜しまぬ御協力をいただいた方々全てに、深く感謝申し上げ、改めて敬意を表します。



上田調査事務所

上原古墳群 坂城町南条地籍に在り、谷川左岸の河岸段丘上に立地する。当初の対象であった石積み14基はすべて古墳でないことが判明した。石積み構築面の下位から、平安時代を中心とした竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑、ピットが検出されている。

土井ノ入窯跡 坂城町坂城地籍、垣外沢川南岸の山麓部に位置し、奈良～平安時代の須恵器・瓦窯跡として知られているが、今回の調査では、時期不明の炭焼窯跡が2基確認されたのみである。

観音平経塚 坂城町南日名地区に所在し、観音沢川右岸の山裾に立地する礫石経塚である。1979年に発掘調査が行われたものの、報告書未刊のため詳細は知られていない。今回の調査では新たに経塚背後の斜面部を調査した。その結果、下部施設を伴う五輪塔群と骨蔵器をもつ火葬墓の存在が確認され、墓域としての性格も明らかになった。遺跡は南向きの山裾斜面にあたり、前面にはなだらかな傾斜地が開けている。

骨蔵器をもつ火葬墓は調査区の南端中央、後述する石敷帯直下で検出した。直径1.2m、深さ0.5mほどの円形の墓域内に、偏平な河原石を組み合わせた石室状の施設をつくり、その内部に、火葬骨片を満した骨蔵器を納める。石組と墓域掘り方との間は土で充填し、さらに土壌全体を覆うように大形の板石が置かれていた。骨蔵器は12世紀末葉～13世紀初頭の古瀬戸四耳壺を用いている。

五輪塔群は調査区南東部、斜面の下部に分布する。各輪に分解した状態のものが大部分を占めるが、火輪または水輪以下が上下関係を保ったままの塔も存在する。凝灰岩と安山岩の二種を主な石材に使っている。各輪の出土総数413、推定五輪塔数132以上を数える五輪塔は斜面を削り出して造成した幅狭い平坦面に配列されている。こうした五輪塔造立区域が6箇所におい



観音平経塚 五輪塔群

て認められ、うち5区域で火葬骨を納めた下部施設が計40基ほど検出された。構造は、偏平な礫を組み合わせた石室状のもの、ピットを掘り込むもの、明確な掘り込みをもたず骨片を敷きつめたようなものの3類に類別でき、前二者が主流をなす。副葬品として、古銭7、刀子2、かわらけ1点が出土した。下部施設の真上に塔を立てているのかどうか、その実態は判然としませんが、埋葬域と五輪塔建立域とが区別されていないのは確かである。埋葬だけの墓域は認められなかった。五輪塔には型式差があり、或る程度長い期間、造立が続けられたようである。15・16世紀をそのうちに含むことは確実と思われるが、さらなる特定は今後の課題としたい。

今回の調査では、経塚そのものの実態は明確にならなかったが、山裾を縁取るように偏平な河原石を敷きつめた石敷遺構がみつかった。やや弧を描く帯状の平面形を有し、現状の規模、弦長14m、幅約1.3mを測る。石敷帯には経塚と同様な多字一石経石が混在し、両者の関連を窺わせるものの、経塚に伴う施設なのか否か、1979年の調査規模・内容が明かでない状況の下では、その確証を掴むことはできなかった。ただし画然と分離できないが、西端よりおよそ6mまでの部分はアラビア数字を注記した礫を含むので、1979年以降の形成になることは明かであろう。

開畝遺跡 坂城町坂城に所在し、中世の製鉄遺跡として著名である。今回の調査地点は製鉄遺構検出地点の西側にあたり、浅い沢により地形的には画されている。調査の結果、8世紀末～9世紀初頭の同一期に当てはまるといえる竪穴住居跡6軒と土坑8基、中世の土坑2基、他に時期不詳の掘立柱建物跡1棟と土坑31基が検出された。遺物は概して少ないが、1基の土坑から、須恵器の完形土器4个体(短頸壺1、杯1、高台付杯2)が出土したものもある。なお、今回の調査では製鉄遺構は検出されなかった。



観音平経塚 骨蔵器と伴う火葬墓(一部復元)

佐久調査事務所

今年度は従来の上信越自動車道関係に加え、新たに北陸新幹線関係の発掘調査を本格的に実施した。対象遺跡は12遺跡で調査面積は約10万㎡である。

上信越自動車道関係では佐久インター以北、東部町境間に所在する佐久市芝宮遺跡群・下前田原遺跡群、小諸市中原遺跡群・長野原遺跡・赤沼遺跡・三子塚遺跡群・三田原遺跡群・岩下遺跡・郷土遺跡・深沢遺跡群の10遺跡について調査を実施した。

前項の「縄文中・後期主要遺跡」で紹介しているように、三田原・岩下においては縄文時代中期末葉から後期前半の集落跡を調査した。両遺跡で検出した後期前半の敷石住居跡群と列石はその配列状況に基本的に共通性が認められ、小規模ながらも環状集落として捉えられる興味深い所見を得ている。また、三田原では後期初頭の柄鏡形敷石住居跡の柄部に階段状の石積みが認められ、柄部が出入口施設の機能も持っていることが判明した。これらの調査成果は、縄文時代中期中葉から後葉を中心とする郷土の調査例とともに、浅間山麓における該期集落の構造的解明にむけて貴重な資料を提供したといえる。

芝宮・中原は浅間火山の裾野に展開する田切り台地

芝宮遺跡群 芝宮遺跡群は佐久市の北部、浅間山麓南斜面の末端部に位置し、田切り地形の台地上、標高745～749mに位置する。遺跡の南東は田切り地形を形成する濁川に接し、その対岸には長土呂遺跡群がひろがり、北西には深い田切り谷を隔てて中原遺跡群が存在する。

今回の調査は上信越道の建設工事に伴うもので、その調査対象総面積は15,000㎡、うち本年度調査総面積は8,800㎡、残り7,000㎡は平成5年度において継続調査の予定である。

調査区は北部をⅠ区、中央部をⅡ区、南部をⅢ区の3地区に大分割し、今年度はⅠ区・Ⅲ区を調査した。検出された遺構は古墳後期から平安時代の竪穴住居跡160軒・掘立柱建物跡34棟・大溝1条・溝8条・土坑約1,000基で、大規模な集落遺跡と言える。

竪穴住居跡のあり方はⅠ区とⅢ区ではその様相を異にしている。Ⅰ区ではカマドの設置される方向がほとんど北向きであるのに対して、Ⅲ区では北向きが7、東向きが3の割合で存在する。

上に立地し、両遺跡は幅55m比高差12mの大規模な田切りを隔てて所在する。調査の結果は古墳時代から平安時代にかけて継続的に営まれた集落跡を検出し、遺構配置や検出状況等から判断すると、この田切りの形成時期は比較的新しく、両遺跡は同一集落であった可能性が高い。周辺の遺跡立地・規模・性格等について再考を要するところである。この外、三子塚では平安時代の集落と煙滅古墳の残存施設を調査し、深沢では縄文時代後期の陥し穴と推定される土坑を検出した。下前田原・長野原・赤沼は遺跡の中心部からはずれたため、遺構は検出できなかった。

北陸新幹線関係では佐久市金井城跡と浅科村土合遺跡の2遺跡について調査を実施した。

金井城は二郭を中心とする調査から、かつての佐久市教委による調査成果に新知見を加えることとなり、大規模な城郭の構造解明に重要な手がかりを得た。

土合は典型的な河岸段丘上の遺跡で、村教委が実施した同遺跡の試掘結果と合わせ、遺跡全体が縄文前期から室町時代に及ぶ複合遺跡であることが判明した。

平成5年度は、上信越道関係で芝宮・中原・郷土を中心に調査を継続する一方、新幹線関係では新たに軽井沢・御代田町内の遺跡を調査する見通しである。



芝宮遺跡群、Ⅰ区全景

大溝はⅠ区の中央部より東寄りに北から南に走る形で検出された。上部の幅5～10m、深さ3mで、断面形はV字状である。底面は北から南に緩やかに傾斜し、底部付近は砂礫の堆積が著しい。底部断面形はU字状で、水による侵食を受けたことが考えられる。しかし、大溝の北端は田切りの崖によって分断されていると考えられるため、その砂礫をもたらしした流水がどのように侵入したのか問題である。田切り地形形成との相関とも絡めて興味の残るところである。

なおこの大溝はⅠ区で見られるもののⅢ区では検出されなかった。その細部の状況、区画・方向等の検討は来年度予定のⅡ区の調査を待たなければならない。

遺構の調査に伴って多くの遺物が出土したが、土器の中では灰釉陶器・墨書土器、金属製品では海獣葡萄鏡・鉄製の農具・馬具・鎌・刀子、骨類では牛馬を主体とする獣骨等が注目される。

古墳時代後期から奈良・平安時代の大規模な集落遺跡が、佐久市・小諸市・御代田町と広範囲に分布し、すでにいくつかの調査も実施されかなりの資料が提示されつつある。今後の調査研究成果と合わせてこれらの遺跡群から東山道・佐久平の開発、あるいは牧との関連や、更に本遺跡と中原遺跡群の間に走る田切り谷の形成、Ⅱ区に伸びると予想される大溝の性格等今後の課題は多い。

中原遺跡群 中原遺跡群は北に浅間火山を望む広大な平坦な台地上にある。調査区内を東西に横切る田切りを中心に1～4区に分割し、平成4年8月3日から、比高差約12mを測る田切りを経て芝宮遺跡群と接する1区の調査から開始した。

その結果、古墳時代末から平安時代初頭にかけて営まれた集落遺跡であることが判明した。住居跡相互の切り合い(類似した覆土)や掘立柱建物跡との重複が多いこと、遺構密度が高いことから調査の進行は難航した。遺跡の内容については今後の検討に委ねる事柄が多いが、現時点での重要な所見を以下に挙げる。

田切り地形の形成と遺跡の立地・・・1区の最南端は6軒の住居跡が現在の田切りに侵食され、中には住居跡の南半分を消失しているものもある。その中で一番新しい住居跡群は平安時代初頭の住居跡である。田切りの形成と集落域の限界を考えていくと本事例は不自然であり、集落が営まれた頃は田切りの幅が現在より狭かった可能性が高いと思われる。このことから現在は芝宮遺跡群と中原遺跡群と別の名称がついている両遺跡は、この田切りの深さ・幅が現在とは大きく異なるものであるなら即断はできないが、当時同一集落であった可能性も考えられよう。

住居跡の掘り方と粘土採掘跡・・・本集落でカマドの構築材として使われているのは、色調が乳白色とややピンク色(カマド内の2次的な熱変色ではない)の粘性がある土で、その生成は佐久市教育委員会が調査の聖原遺跡群の所見によると繰り返し堆積した浅間火山の火砕流による火山灰の熱変成であることがわかってきている。これが地表上・地表近くにまで吹き上げてきたものを採掘しているようである。この採掘跡は単独にも存在するが、住居跡を掘り下げている時にこの



中原遺跡群

部分にあたり露天掘りのようにして掘り下げたあと、床を形成しているものもある。

遺構の分布・・・遺構密度をみると調査対象面積6,000㎡内に約130軒で、中原遺跡群1区の遺構の重複の多さは芝宮遺跡群1区北側の遺構重複状況と同じである。2区の南側までその状況は続くが北側にいくほど住居跡は減少し掘立柱建物跡が多く存在している。平成5年度の3・4区の状況と芝宮遺跡群の全体像が明らかになり、集落の分析を進めていく中で古代集落の一端が今後解き明かされていくことになるだろう。

金井城跡 金井城跡は浅間山南麓末端の台地部に位置し、佐久市小田井の金井地籍に所在する。

湯川右岸に面した断崖(標高差50m)の張り出し部に主郭を置き、主郭からは扇状に二郭・三郭・外郭・北郭が空堀によって画されて配されている。

調査は平成4年4月から10月にかけて約15,000㎡を実施した。既存の調査としては昭和63年から平成元年にかけ、小田井工業団地造成事業に伴う発掘調査が佐久埋蔵文化財調査センターと佐久市教育委員会によって主郭・二郭を除いた8万㎡(中世城郭の大規模調査として県下において例が見られない)の調査が実施され、平成3年には膨大な資料と成果が報告書として刊行されている。平成4年4月には道路工事に伴い外郭の一部が調査された。

前者の調査では城域が20万㎡を超え、主郭から三郭は整然と区画された住居空間をもった武田氏の遠征時に使用された駐屯地的性格の平城であろうと想定された。今回これを参考に二郭の外側約半分と北郭の南端部・三郭の調査を実施した。

検出された遺構は堅穴建物跡128軒、掘立柱建物跡17棟(二郭12・三郭5)、柵列20条、土坑140基、堀5条(佐久市調査に連続)、溝3条(2条は時期不明)である。

今回調査では新たな成果をいくつか得ることができた。一つ目は三郭内の二郭側の溝(佐久報告溝7号)である。城内で唯一流水のあるものであり外郭側に4箇所の洗い場(写真)が検出された。佐久市との調査を含め10万㎡近くの調査の中で唯一生活のにおいのする遺構である。二つ目は道についてである。二郭のほぼ中央の空堀から橋脚の柱穴が確認され、城外から主郭に至る進入路の一部が今回判明したことである。三つ目は二郭の建物配置が三郭・北郭と異なる点である。二郭は三郭と同様中央に道路が配置されその左右に遺構が配されるが、二郭では掘立柱建物跡といくつかの堅

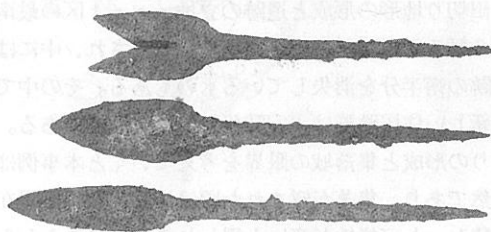
穴建物跡によって一つの住居空間が構成される可能性がいっそう窺えそうである。堅穴建物跡は『島原の乱図屏風』に見られる堅穴の倉庫(絵)に類似したもの(図)が多く認められる。

出土遺物については佐久市の調査と同様その出土量は貧弱で、土器類に比べ石臼類が目立つ。しかし、2号堅穴建物跡の覆土中から巨大な鉄鍬(写真)が3本重なって出土したことは注目される。27～32cm・200gを超えるもので儀礼か威嚇に用いられたものではないかと思われる。

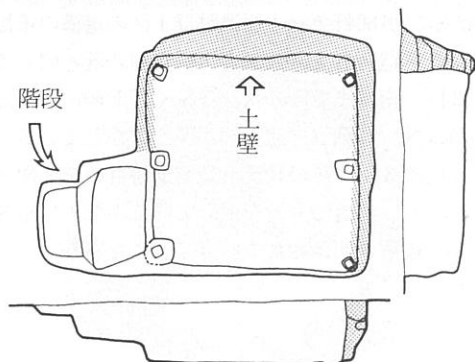
今後は今回の新たな成果に佐久市の貴重な調査成果をふまえ、佐久地域の特色ある平城解明に向かい整理検討していきたい。



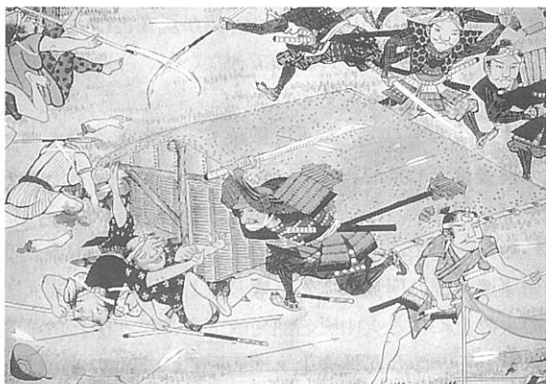
三郭の洗い場



鉄 鍬



91号堅穴建物跡



『島原の乱図屏風』に見られる堅穴の倉庫
(戦国合戦絵屏風集成より)